

三井物産環境基金～未来につながる社会をつくる～ 2015 年度研究助成の総評

案件選定委員会

2015 年度三井物産環境基金の研究助成は、採択件数 10 件（総額 64,640 千円）となりました。応募総数 123 件から選考した結果です。

本基金を 2005 年に立ち上げてから丁度 10 年になります。この期間における国内外の環境分野の研究動向を眺めると、環境に関する科学的理解や技術開発についてはかなりの深化が見られたものの、環境の変化を社会としてどう受け入れ、どのような社会をつかっていったらよいのかという視点に立った取り組みはまだ弱いように感じられます。このため、本基金の助成開始当初は、「地球気候変動問題」、「エネルギー問題」などの自然科学的な課題を 7 つに分類して課題を取り上げましたが、2014 年度からは、これらを「地球環境」、「資源循環」、「生態系・共生社会」、「人間と社会のつながり」の 4 つの大きな領域にくくり直すことにしました。これは、東日本大震災からの復興という重要課題も含め、「環境」を自然科学的な側面からとらえるだけでなく、環境と人の関係を考えることを重視し、「未来につながる社会をつくる」ことを主要な命題として位置づけた結果です。

以上のような考えに基づき、案件選定にあたっては、当該研究が地球環境問題の解決や持続可能な社会の実現に高く貢献すること、さらに、当該研究の成果が社会に広く伝わることに配慮しています。今回採択された 10 件の課題は結果として全てが、生物あるいは生態系の保護・保全に関係していますが、各課題はいずれも人間と自然あるいは生物・生態系のより良い関係をつくることに貢献すると期待されるものです。また、それぞれの課題は気候変動による生態系への影響、生態系を介しての資源循環などに深く関係しており、全体として 4 つの領域をカバーしています。

採択された課題を個別に見ると、気候変動による影響に関する研究として、北方生態系のストレス応答プロセスの解明を目指す研究、モンゴル北方林の劣化メカニズムと修復保全に関する研究があります。また、絶滅危惧種の保護に関連する研究として、アマゾンに生息するマナティの保護・野生復帰に関する研究、渡り鳥コアジサシの越冬地・渡りルートの把握と保全に関する研究、シマフクロウの生息地を「隠すから見せる」に転換することで保全と観光利用の両立を目指す研究、北海道と極東ロシアの希少野生生物の近縁関係を遺伝子レベルで解明して国際共同保全につなげようとする研究、アオウミガメの孵卵条件解明から保護活動を再考しようとする研究があります。森林保護については、人工林の皆伐の影響を緩和する保残伐に関する研究があります。また、海外からの応募として、メコンデルタにおける浮島方式の米作に関する豪州の大学による課題が採択されました。東日本震災からの復興に関する研究は残念ながら採択されませんでしたでしたが、震災後 5 年を経てさまざまな対策とともに緊急的に必要な研究も多く実施されてきましたので、それらの

成果を振り返り、今後必要な研究の課題・内容・手法を再考すべき段階に入ったからではないかと思われます。

今回採択された課題には、生物・生命科学系からのアプローチが多く、採択されなかった課題も含めた応募全体についても同様の傾向が見られています。人と自然生態系の関係を考える上で、生物・生命科学系のアプローチが不可欠で極めて重要なことは論をまちませんが、本基金では「学際・総合性」の視点を重視しています。今後、物理・化学系や工学系からのアプローチ、経済学的アプローチなども含めて、より多様な研究提案が寄せられることを期待しております。